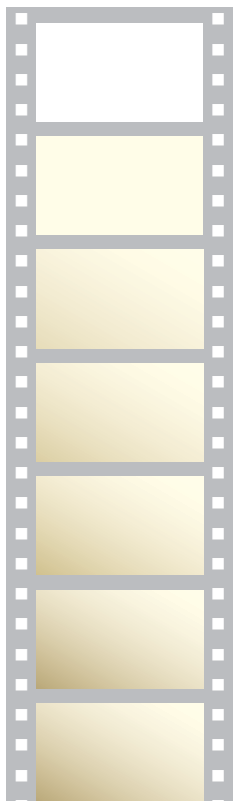


伸^{ノブ}さんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第三十三回 「黒澤とプレスリー」①

テープレコーダーとラジオ番組といえば、大変なことを忘れていました。63年（昭和38年）3月公開された映画「天国と地獄」です。

黒澤明監督24本目の作品でした。エド・マクベインの小説「87分署シリーズ・キングの身代金」の一部を借用し、また、当時誘拐罪は刑が軽い罪だったこともあり、黒澤監督が誘拐事件の映画を作るきっかけになったと言えるのではないのでしょうか？

製靴会社の重役の子どもと間違えて、その運転手の子どもを誘拐しても金を要求する犯人と会社の重役たちの内乱が映画の前半で描かれます。警察に通報すると、刑事たちがパートの店員に変装し家具を届けにやって来ます。その時、犯人からの電話を逆探知する装置と、立派なオープンデッキのテレコ（テープレコーダーの略称）を設置します。

犯人からの電話はすべて録音し、ストーリー展開に沿って、映画を観ている観客

にも聴かせるのです。

「犯人がどこから電話をしているのか？」テレコの音から分析されます。それは電車の音のなかに一種の習慣性のある音が録音されているからでした。結局その音は横浜駅の乗務員により、パンタグラフの音とは違う、旧式のポールが架線にすれて出る音。それは江ノ電、江ノ島電車だということがわかるのです。この音の分析により、犯人は江ノ島方面に住んでいるのではないかと推理できたのです。これが犯人逮捕の有力な手がかりとなりました。

次のシーンは、犯人が殺したはずの共犯者が生きているかも知れないと、共犯者の住む江ノ島近くの別荘へ確認に行った時のシナリオです。ここでラジオが登場します。

映画「天国と地獄」のシナリオから

(原作 エド・マクベイン「キングの身代金」)

脚本 小国英雄・菊島隆三・久板栄二郎・黒澤明)

シナリオ

(117) 腰越の別荘

深夜である。

犯人は来た

ラジオの深夜放送の

鳴っている部屋の

外に立つ

犯人「おい、ヤクを持って来たぞ」

電気がパツとつく。

ピストルを構えた、

戸倉、田口、中尾、荒井。

戸倉「おい、竹内、これで

貴様は死刑だ！」

犯人、ハンカチの

ように白くなる。

映像と音声

(江ノ島の近く)

ラジオから男子アナの声で時刻のアナウンス

Q「0時15分になります」

すると、音楽が流れる。イタリアのナポリ

民謡「オー・ソレ・ミオ」の演奏が始まり、

女子アナの声で

Q「ミッドナイトミュージック」の番組

タイトル告知。

曲は流れていくが、しだいに場面ごと大

きい音になり、ラジオの音から映画全体の

BGMとなっていく。

黒いミラーサングラスをかけた犯人が、

月の光に光るカンナの花の間から、共犯者

ポケットから何か出して
口へほうりこもうとする。

中尾と荒井、

飛びかかって

その手をつかむ。

その手からへロインの

包が二つ落ちる。

の部屋をうかがい、吸っていたタバコをベ
ランダの柱で消して、部屋の前まで歩いて
行く。

すると、部屋から二人の刑事、犯人を挟む
ように二人の刑事が出てくる。驚く犯人、そ
して走って逃げる犯人。

刑事が犯人を逮捕する。

ラジオから流れる

「オー・ソレ・ミオ」の演奏は大きな音で続
いている。

(続)

(文中敬称略)

伸

平成23年12月